

テサロニケ人への手紙 # 9

「テモテの吉報」 | テサロニケ人への手紙 3章6節～3章13節

2020.10.11

はじめに

1 テサロニケの手紙の学びを続けていますが、今回で前半が終わります。前回、パウロはテサロニケを逃れてから、なぜ再訪することができなかつたのかについて記しました。実は彼は何度も再訪しようと試みたのですが、サタンの妨げによってかないませんでした。それで一行はパウロの代わりに同労者であり弟子のテモテを派遣し、彼が派遣されるにふさわしい神の器であることを記しました。今日取り次ぐ御言葉では、派遣したテモテはパウロのいるアテネに戻ってきて、テサロニケ教会の現状報告をします。その報告を聞いたパウロの感謝と祈りを見ていきましょう。

1. テモテの吉報

3:6 ところが今、テモテがあなたがたのところから私たちのもとに帰って来て、あなたがたの信仰と愛について良い知らせを伝えてくれました。また、あなたがたが私たちのことを、いつも好意をもって思い起こし、私たちがあなたがたに会いたいと思っているように、あなたがたも私たちに会いたがっていることを知らせてくれました。

パウロがテモテから受けた報告はとても良い知らせでした。もちろん、生まれたばかりの教会ですから終末論について誤解をしていたり、まだ教え導かなければならぬことがいくつもありました。それは後半の4～5章で取り上げられます。それにしてもこの若いテサロニケ教会はパウロが植えた神の御言葉に固く立って、迫害の中にあっても神を信頼して信仰の歩みを続けていました。また彼らの宣教と愛の行いはマケドニアとアカヤ地方全域に大きな影響を与えるほどになっていました。まさにパウロが種を植え、神が恵みによって成長させてくださったのでした。

また、パウロがとても心配し、常に祈っていたのが彼らとの信頼関係でした。ユダヤ人の暴動、同胞のギリシア人たちからの迫害、反対者からパウロへの辛辣な批判とあらゆること用いて牧会者パウロとテサロニケ教会の信頼関係を引き裂こうとサタンは働いていました。パウロはこれらの事を「サタンの妨げ」として記していますが、これは現代の教会にも常に起こることです。サタンは牧師と信徒の信頼関係、兄弟姉妹同士の信頼関係を破壊しようと働きます。

しかし感謝なことにテモテの報告で、このパウロの心配は杞憂に終わりました。パウロの一方的な愛の配慮だけでなく、テサロニケの人々もパウロのことを心配し、しきりに会いたがっていました。これはパウロにとって何よりも良い知らせでした。ここに主にある兄弟愛の美しさ、主にある牧会者と教会の兄弟姉妹の信頼関係を見ることができます。

3:7 こういうわけで、兄弟たち。私たちはあらゆる苦悩と苦難のうちでありながら、あなたがたのことでは慰めを受けました。あなたがたの信仰による慰めです。

聖書協会共同訳

3:7 それで、きょうだいたち、私たちは、あらゆる困難と苦難の中でありながら、あなたがたの信仰によって慰められました。

あらゆる困難と苦難、今風に言えば押しつぶされそうなプレッシャーとストレスでしょうか。パウロのヨーロッパ宣教は人の目から見れば、決して成功しているようには思えませんでした。ピリピでの騒動と投獄、テサロニケの迫害、テサロニケを去った後もパウロたちはアテネやコリントでも経済的困窮や苦難の中にもありました。しかしテモテからテサロニケの人たちの信仰の様子を聞いてパウロはとても慰められ、安堵しました。また彼らはパウロ一行の宣教活動を経済的にも支援してくれました。パウロは、テサロニケの人々が誘惑に負けて、彼の労苦が「無駄になる」ことを心配していましたが、彼らは信仰に硬く立って、しっかりと主に結ばれていました。パウロの労苦は報われ、無駄にはならなかったのです。

3:8 あなたがたが主であって堅く立っているなら、今、私たちの心は生き返るからです。

「私たちの心は生き返る」という言葉は、他の翻訳では「まさに生きていますと実感するからです。」「生き甲斐があります」「安心しています。」と訳されています。皆さんが生きているのを実感するのはどんな瞬間でしょうか。

パウロは自分の生きがい、生きる実感をこの事に見出しています。「人々が福音によって救われ永遠の命を持つ、罪の生活から解放されて、キリストの愛を生きるようになる。」このことがパウロの生きる意味となっていました。これはパウロだけではなく私たち主に仕えるすべてのクリスチャンの最高の喜び、生きがいとなるのです。

2. 神への感謝と願い

3:9 あなたがたのことで、どれほどの感謝を神におさげできるでしょうか。神の御前であなたがたのことを喜んでいる、そのすべての喜びのゆえに。

聖書協会共同訳

私たちは神の前で、あなたがたのことで喜びに溢れています。この大きな喜びに対して、どのような感謝を神に献げることができるでしょうか。

テサロニケを去ったことに、幼い子どもを置いてきてしまった親のような忸怩たる思いを持っていたパウロにとって、テモテのもたらした報告の内容は、驚くべきものでした。テサロニケ教会は神ご自身

が守り導いて下さっていました。激しい迫害の中で信仰と愛に溢れ、パウロを慕い心配して祈ってくれていました。

このような素晴らしい教会に成長させてくださった神の恵みに対して、一体どのような感謝をもってお返ししたらよいのだろうか、パウロの内側から喜びが溢れ出ているのです。神が私たちの人生の中に与えてくださる一つ一つの祝福も、決して私たちが優れているからではありません。神は愛する子に対してよいものを惜しまれない方なのです、神は私たちがいつも気にかけていてくださる父です。この神に日々感謝を捧げようではありませんか。

3:10 私たちは、あなたがたの顔を見て、あなたがたの信仰で不足しているものを補うことができるようにと、夜昼、熱心に祈っています。

テサロニケの教会は、神の恵みにより若い教会であるのにも関わらず、信仰と愛に満ちていましたが、如何せん一か月足らずしか時間がなかったため、福音の全体像を教えることができませんでした。そのため信仰に欠けた所がありました。パウロは顔と顔を合わせて、彼らの不足を補う奉仕をしたいと願い、夜昼と熱心に祈りました。

長浜純福音キリスト教会は、教会の活動以外に様々なキリスト教宣教団体のために祈り、献金という形で支援しています。ハーベストタイム、ライフライン、新生運動、三日月クリスチャン祈禱院、止揚学園、メトロワールドチャイルド、九州キリスト災害支援センター。私たちは日々の恵みを感謝して、神のご用のために用いたまえと祈り、献金を捧げます。その献金は世界の人々、日本の人々の救霊のために用いられ、その働きに従事する働き人を支え、飢餓に苦しむ子供たちの食事となり、重度の障害の方々の暮らしを支えています。私たちもパウロと同じくキリストの体であるこれらの人々を補っているのです。

今週届いた、メトロワールドチャイルドのニュースレターから「神様を見ました」というケニアの証しを一つを紹介します。

カヤには2人の息子がいて、2人ともメトロの日曜学校プログラムに参加しています。彼女には夫がいましたが、ある日家族を捨てて家を出て行ってしまったため、カヤは家賃も払えなくなり、やがて一家は食べるにも困るようになりました。それでも、新型コロナウイルス感染症の影響で学校が閉鎖されるまではメトロのスポンサー制度のお陰で給食があったので、子どもたちだけは毎日食事をする事ができて感謝していました。

メトロが活動するアフリカのケニアでは、新型コロナウイルスの流行以前から極度の貧困状態にある家庭が多かったのですが、今はさらに、多くの人々が長引く食糧不足に苦しみ飢餓状態に陥っています。そんな中で、ある女性が絶望の末に錯乱状態に陥って「子どもが餓死するのを見たくない」と、4人の子どもたち全員を自らの手で殺したという悲劇も耳にしました。あまりの惨状に言葉もありません。

メトロでは、支援している子どもたちとその家族が生きて行くためにサポート体制を改善して食事の供給に全力を注いできましたので、カヤの子どもたちが安心して食事できていることはスタッフの喜びでもありました。

しかし学校が閉鎖されると、カヤは困窮していた当時に戻ったような気分になり、子どもたちをどうやって食べさせて行こうかと悩み出しました。途方に暮れ、絶望的になり、この若い母親はやがて「自殺するしかない」と思い詰めるようになりました。すると2人の息子たちが、メトロの日曜学校で学んだみことばをカヤに伝え始めたのです。「神様がいつも気にかけてくださるから大丈夫」と断言し、「何があっても神様はママの天のお父様なんだよ」と。この励ましの言葉がカヤの心に触れ、「こんな状況だからこそ神様に信頼する必要がある」とカヤは気がつきました。そして、もう、生活のことをあれこれ思い悩むのをやめることにしました。

数日後のことです。カヤのお兄さんが突然やってきたかと思うと、なんとその月の家賃を支払ってしてくれたのです。カヤは思いました、「奇跡だわ」と。「神様が私への大きな愛を見せてくださった！」と。

続いて神様は、メトロの支援者や世界中のスポンサーの惜しみない協力を通じて、空腹に苦しむ人々への思いやりを示されました…

カヤの家に、メトロのスタッフがやってきたのです。家族向けの大きな食料箱を持って。中には、コーンミール、小麦粉、レンズ豆などの主食もたくさん入っていて、数週間は十分に食べられる量がありました。カヤは泣き出し、喜びのあまり涙が止まりませんでした。その時カヤは、神様が確かに目の前に現れて「いつも気にかけている」と証明してくださったのだとわかりました…息子たちが教えてくれたように！涙とともに喜びに輝く笑みを浮かべて、カヤはメトロのスタッフに言いました。「私、神様を見ました！」

スタッフはカヤの家族と共に祈り、「神様を信じ続けましょう」と励ましました。カヤの家を後にしたスタッフの耳には、彼女の家からカヤと息子たちが主を喜び賛美する声がずっと聞こえていました。カヤのように、イエス様の慈しみと愛を知る必要のある人たちのために、メトロがイエス様の手足となって手を差し伸べる活動ができているのは、あなたのお陰です。感謝します！あなたのご協力により、ケニアやフィリピンの国際チームは、命をつなぐ食料品を必要な家庭に直接、迅速に届けることができます！

3. パウロのとりなし

パウロはこの前半の最後にとりなしの祈りを記します。その内容は3つあります。

3:11 どうか、私たちの父である神ご自身と、私たちの主イエスが、私たちの道を開いて、あなたがたのところに行かせてくださいますように。

ここから三つの祈りが始まりますが、その主語は「**私たちの父である神ご自身と、私たちの主イエスが**」となっています。すべてを成し遂げてくださるのは三位一体の神ご自身であり、私たちが何かを成すのではないということを、この祈りから教えられます。教会の活動においても、わたしたちの個人的な生活の一つ一つ選択においても、神が主体であるということです。私たちが何かを計画して、戦略を立てて、そして主がそれを助けてくれるように祈るのでは、神ではなく私たちが主体となります。しかしこれは日常的によくやってしまうことでもあります。人が作為的に行うことは、みな肉の行いです。主の御心にかなわないのであれば成功しません。一時的にうまくいっているようでも、主の御心だけが必ず成就するというのが聖書の教えです。私たちは、何事においてもまず第一歩目から祈りが必要なのです。一日の初め、仕事の初め、学びの初め、遊びの初め、教会活動のすべての初めに、祈りをもって始めましょう。そして主と相談しましょう。「主にあって固く立つ」とありますように、主の導きをいつも祈り求めましょう。

さて一つ目の祈りは、もう一度テサロニケに訪れる道を神が開いてくださることです。反対するユダヤ人の監視や、法的にもテサロニケに訪れることを禁じられていたと思われるパウロにとって、主が道を開いてくださらなければ、どのような宣教の働きをすることはできませんでした。同様に私たちも周りの人々への伝道の道を開いて下るよう祈りましょう。

3:12 私たちがあなたがたを愛しているように、あなたがたの互いに対する愛を、またすべての人に対する愛を、主が豊かにし、あふれさせてくださいますように。

二つ目の祈りは、愛が満ち溢れるようにというものです。テサロニケの教会はすでに愛の教会でもありました。パウロはその教会に対してさらに愛が溢れるようにと祈っています。これは矛盾ではなく質の問題です。「**私たちがあなたがたを愛しているよう**」と書いているように、パウロは指導者として、愛の模範を示してきました。またこの手紙においても彼らに対する愛を表わしています。キリスト教の愛には次のような順序があります。すなわち最初は、その愛はクリスチャンたちの間の兄弟愛から始まります。そして周囲の人々、さらに全ての人々へと溢れていくのです。

同じ神を信じている兄弟姉妹同志が愛し合うことができなければ、周囲の人など愛することはできません。世の中にも愛という言葉は溢れていますし、頻繁に使われています。クリスチャンであっても一般に使われている愛と混同してしまいがちです。聖書のいう愛というものがどんなものなのかその定義を思い起こしてみたいと思います。

13:4 愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。

13:5 礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、

13:6 不正を喜ばずに、真理を喜びます。

13:7 すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます。

この聖書が教える愛のリストを見ると、私たちが考えている愛とは、まったく異なる性質のものであることがわかります。これらは私たちのうちには全くない愛、神の愛なのです。このような愛は神から与えられなければ持つことができません。

3:13 そして、あなたがたの心を強めて、私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒たちとともに来られるときに、私たちの父である神の御前で、聖であり、責められるところのない者としてくださいますように。アーメン。

三つ目の祈りは、聖さに関するものです。パウロはテサロニケの兄弟姉妹が、「**私たちの父である神の御前で、聖であり、責められるところのない者としてくださいますように。**」と祈っています。ここで使われている聖さというギリシア語は、「ハギオースユネー」という言葉が使われています。これは聖化の過程、途中の意味ではなく、完成された聖い状態を意味する言葉で、七十人聖書では神にのみ使われている言葉です。これは、完全な聖さであり、パウロはテサロニケの兄弟姉妹がこの聖さの域に達するよう願っています。

パウロのこの祈りは、願いでもあり、希望であり、必ず将来起こる神の御業の宣言であります。愛もそうですが、私たちのうちには真の聖さありません。また自力で聖くなることもできません。すべてのクリスチャンの心を強め、再臨の時に神のみ前でこの完全な聖さを持つものとしてくださるのは聖霊なる神です。パウロがテサロニケの兄弟姉妹の愛が増し加わり、完全な聖さをとりなし祈ったように私たちも互いに愛と聖さを求め、とりなしあいましょう。

るつぼというものがあります。中に金属やガラスを入れて高温に熱して溶かすための道具です。神は私たちが試練という「るつぼ」に投げ込み、そこで私たちが訓練されるお方です。それは神が私たちに困らせようとしているのでも、意地悪をしているのでもありません。私たちの人格と信仰とを精錬し、不純物を取り除き聖くするためです。また神は、試練の中で私たちが弱り果ててしまわないように、必ずのがれの道も用意してくださいます。あなたは今、試練の中におられるでしょうか。それなら、神の恵みにより頼むこと、神の摂理の御手を見ることを学びましょう。

おわりに

1. 神への感謝にあふれ、キリストにある生きがいをいただきましょう。
2. お互いの不足を補い合い、祈り合いましょう。
3. 主の導き、主からの愛、主にある聖さを祈り求めましょう。